

古代会津の陶器 — 役人の邸宅 鏡ノ町遺跡 —

喜多方市の鏡ノ町遺跡は、奈良時代は会津郡役所の役人、平安時代は会津郡から分かれた耶麻郡役所の上級役人が住んだ邸宅と推定されています。奈良～平安時代初めに作られた奈良三彩の小壺、平安時代（9世紀）に作られた緑釉陶器の皿、灰釉陶器の皿や壺などが発見されています。これらの品々は、上級役人の経済力の高さを思わせるものです。



磐城郡の陶器 — 古代陶器の宝庫 小茶園遺跡 —

いわき市の小茶園遺跡は、古代の磐城郡役所に関連する遺跡と推定されています。平安時代に作られた緑釉陶器（10世紀）、灰釉陶器（9世紀後半）の碗・皿などが発見されています。緑釉・灰釉陶器の出土量は、福島県内では屈指の遺跡です。



磐瀬郡の陶器 — 役所・寺・有力者の遺跡 —

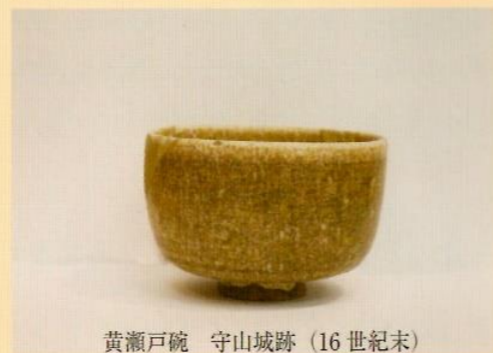
須賀川市の中心市街地にある栄町遺跡は古代磐瀬郡の役所跡。近くの上人壇廃寺跡は当時の寺院跡です。また、同市仁井田の矢ノ目 A・B 遺跡は平安時代の有力者が住んでいた屋敷跡で北明石田遺跡はその近くにありま。仁井田地区には、平安時代に栄えた大きなムラがあったようです。

各遺跡の緑釉陶器、灰釉陶器ともに 9 世紀に作られたものです。ここでも陶器は限られた人達の持ち物でした。



灰釉陶器の行く末 — 中世陶器へ —

灰釉陶器を作る技術は、中世の瀬戸焼に受け継がれ、日常品の碗や皿、壺類を作っていました。後には、灰釉のほかに酸化鉄を原料とする鉄釉ができ、茶道で使う天目茶碗などの茶道具、装飾品の壺、仏具の香炉など様々なものが焼かれました。また、瀬戸の焼き物は美濃焼や黄瀬戸などにも技術が伝えられ、中世を通して東日本一帯に流通しました。

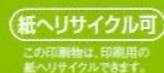


※所有者の明記がないものは、郡山市教育委員会蔵

平成 21 年度企画展 古代の陶器 — 緑色の平安ブランド —

■編集・発行/財団法人 郡山市文化・学び振興公社 大安場史跡公園
福島県郡山市田村町大善寺字大安場 160 番地
電話：024-965-1088 FAX：024-965-1090
URL：http://www.binka-manabi.or.jp/oyasuba
Mail：oyasuba@bunka-manabi.or.jp

■発行日/平成 22 年 2 月 27 日



古代の陶器 — 緑色の平安ブランド —

古代の人たちが使っていた陶器は、奈良時代から作られ始めます。中でも薄緑色の釉をかけた灰釉陶器や緑色の緑釉陶器は、平安時代に広くに流通します。ただ、日常使われていた土師器や須恵器と比べると出土する量はきわめて少なく、役所や宗教関係の施設、地域を代表するムラなどで使われたものでした。

この企画展では、古代の人々が憧れた緑色の焼き物—陶器—を紹介します。

会 場 大安場史跡公園
ガイダンス施設 エントランスホール
開館時間 午前 9 時～午後 5 時 (入館は 4 時 30 分まで)
期 間 平成 22 年 2 月 27 日 (土)～3 月 28 日 (日)
休館日 月曜日 3 月 22 日 (月) は開館し、3 月 23 日 (火) が休館となります。

古代の陶器

— 緑色の平安ブランド —

大安場史跡公園 平成 21 年度企画展



【主催】郡山市 郡山市教育委員会 財団法人 郡山市文化・学び振興公社

旧石器時代

縄文時代

弥生時代

古墳時代

飛鳥時代

奈良時代

平安時代

鎌倉時代

室町時代

紀元前 11,000 年前ごろ

紀元前 300 年前ごろ

西暦 200 年

300 年

400 年

500 年

600 年

700 年

800 年

900 年

1000 年

1100 年

1200 年

1300 年

縄文土器

弥生土器

はじき土師器

はじしつどき土師質土器

朝鮮半島から 須恵器

すえきけい びぜんやき 須恵器系陶器 (備前焼など)

かいゆう 灰釉陶器

しきけい せとやき 瓷器系陶器 (瀬戸焼など)

朝鮮半島から りよくゆう 緑釉陶器
ならさんさい 奈良三彩

焼き物の変遷

古代の行政区分と陶器 (展示品) が発見された遺跡

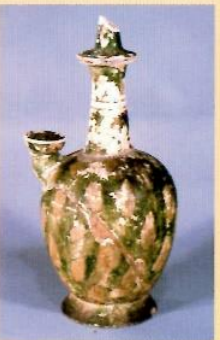


古代の陶器を焼いた窯



みどりいろ とうき 緑色のブランド —陶器—

陶器は素焼きしたものに、釉をかけて二度焼きしたものです。7世紀代に朝鮮半島から緑釉陶器の技術が伝わったとされ、本格的に国内で陶器が作られたのは奈良時代 (8世紀) になってからです。奈良時代には緑釉陶器や唐 (中国) の技術の影響を受けた奈良三彩が作られました。その後、平安時代 (9世紀) になると愛知県の猿投窯で灰釉陶器が作られました。



二彩浄瓶

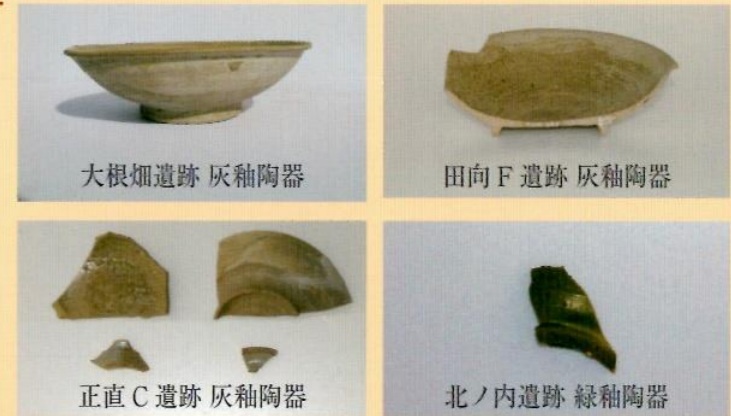
緑釉陶器 釉は鉛を主原料にして、着色剤に銅を使い緑色に発色させた陶器です。平安時代 (9世紀後半) には、中国の青磁に似せたものが京都近郊や愛知県の猿投窯などで作られました。碗や皿それに壺などが主な製品です。贅沢な焼き物で、貴族層や寺、神社の人たちに好まれました。また、地方では、上級役人や地域の有力者層が使っていたようです。緑釉陶器は 12 世紀代になると作られなくなりました。

奈良三彩 奈良時代 (8世紀) に焼かれた陶器です。表面が緑・茶・白の三色からなります。白は鉛を原料とした釉の地色 (透明釉)、緑は銅、茶は鉄を着色剤として入れています。郡山市七ツ池遺跡出土の二彩浄瓶 (国重要文化財 郡山市小原田 円寿寺蔵) は白と緑の二色で、めずらしい作品です。

灰釉陶器 草木の灰を主な原料にした釉をかけた陶器で、黄緑色や緑白色をしています。平安時代の初め (9世紀)、猿投窯で作られ始め、10 世紀の頃には東海地方の各地でも作られるようになります。主に碗・皿の日常食器や壺などが焼かれました。11 世紀の終わり頃には釉をかけないものになっていきました。

あさかぐん 安積郡の陶器 —陶器を使う有力者たち—

郡山市内で発見された灰釉陶器は、いずれも9世紀代のものです。大根畑遺跡 (安積町) は安積郡の上級役人である文部氏の本拠地の可能性があります。また、南山田遺跡、正直 C 遺跡、田向 F 遺跡 (以上、田村町) は地域の有力者がいたムラです。他に皆屋敷遺跡や北ノ内遺跡 (以上、西田町) からも灰釉陶器、緑釉陶器が発見されています。



※正直 C、田向 F 遺跡出土品は福島県教育委員会蔵、写真掲載は福島県文化財センター白河館承認

焼きものの始まり 縄文土器

今から約 13,000 年前に初めて土器が作られました。縄文時代の土器は、粘土の紐を積み上げて形を作り、縄目や線などの文様をつけた後、野焼きしたものです。縄文土器に始まる土器づくりの技術は、弥生土器から土師器へと受けつがれていきます。



約 4,500 年前の縄文土器 妙音寺遺跡

縄文土器の子孫 土師器

古墳時代から平安時代にかけて作られた、素焼きの土器です。文様はなくなりますが、奈良時代までは粘土の紐を積み上げて作っていました。平安時代からは作り方が大きく変わり、ロクロを使って作るようになります。主に、日常の食器や煮炊き用の甕などが作られました。



9~10 世紀の土師器 清水台遺跡ほか

大陸伝来の技術 須恵器

古墳時代の中頃 (西暦 400 年前後) に、朝鮮半島からあらたな焼き物の技術が伝えられました。土師器が野焼きで作られたのに対して、本格的な窯で焼かれた須恵器は、硬く焼き締まり、青っぽい灰色に焼きあがっています。日常の食器の他に壺や甕、そしてさらに不思議な形のものまであり、土師器よりは高級な品物でした。



9 世紀の須恵器 西前坂遺跡